へ9
3869
91

言葉の移り序
冠詞接尾辞語句の
かわりよりいとまぢかく
思ひ合はせつつ
作り句とものの陰ひ
その句をとぐく詞書を
ちちぶ、ちちぶ絵に
詞書なれば
をちこちおもひ
句数多のうちなれば

91
3869
91
創
3942
25
大正七年三月
室井平蔵

丁数かきてとかへて
ぐしの見ふるばう
ハりをとびはなれまうわ
せまとたゆしてとど
うちに又陰形一ぐんして
ゆぐうてなぐて云ことを
ひとくぐくんば
よぐうてぐけの
ぬきもかくて
ゆき書ひとくくもいとうて

やうくにてとみをとびのく
にうくかの又ぐびもかゆ
おかをとびくぐさくて思
ぐりて白の穂の中ように
白くくをうるふ反交
一ぬ一あうておりうを
見ふをくびくかくくめ
しつうの其仕白とつ
人うきあぐたの白のの
越向を新くくもあて

作意を成し又言葉の
書きたぐ手をまつふこと
ゆ試あらはせまこいひてん
よ秋しをとさぐう意
味は一句の終結ことあて
只影入と所要に浦く
人をあらひて寒ぶと
さればこそはぐまただけ句より
たやもちゆのゆのなども
其秀句の場ぶん

この
世ちもいとぶる句をは
ちる人をおのぼる知る
ぶしちはどしもの
俳の便ふ言葉の終も
なしちる

戯作芦角

題目録

(3) 一紙に 十四 一様で

いろいろ
いぶくろい
ひろわて
ひはかりや
つきたて
つきて
つが金衣
いぬのかく

いろいろ
いぶくろい
ひろわて
ひはかりや
つきたて
つきて
つが金衣
いぬのかく

(3) ろくろくして 十六 ろくろ志め
ろわりて
ろくろ細工
ろくんがる
ろくろくきぶし

(4) はくはくして 十七 はくはくして
けでうして
けぶくふくり
けんくわの花
けぶくり
けはくあと

はくはくして
けでうして
けぶくふくり
けんくわの花
けぶくり
はくあと

げんかんで
ぞうりを
はきながら
へぐり付き
ぐるぐるして
ぐりぐりと
世界
どこい
ぐるぐる
ちゃと

ぼろぼろ
ぐるぐる
二十二丁
ぐるぐるで
へんぐるして
別ぐるり
をどけて
二十四丁
ぐるぐる
年がより
ぐるかく
ぐるぐる
ちゃと

けんぐるぐる
にぐるぐる
十九丁
二階ぐるぐる
あるかるわるこそ
にぐるぐる
ぐるひのぎ
ぐるぐるや
二十丁
ポイしし
ぐるぐる
ぐるけ
ぐるぐる

ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる

ごかくレコ　どうらくも
とちうもない　とんてん
とうとうして　とくとみずや
どびやこい　戸があいて

ⓒち
ちから一ぱい　二十六丁　ちよこぶし子方
ちくりめ　ちよこつし　ぞ
ちんまりと　ちびひます
知恵ぐらく　地ごろで
チトさらん

ⓡり
ちよとはめん
ちいさいあるで　りやうあう方　二十七丁

あちらぎ一ぷん　あはれかへり
りんきして　あられぞう
ぬえとせあて

ⓝぬ
ぬつとして　二十八丁
ぬりえて　ぬるいし

ⓡる
るすつかひ　二十九丁　るすじやく

ⓦを
をそがし　旧丁　をかさうじや
をこるやの　をおとはる
おとうぜる　をとさめます
おことかけれ　をしいめじや
大けをふめ

ⓦわ
わくせきと　三十丁

こみすれるや　さらんぢまき
ところやせぬ　わらし場で
わすれてきて　ところいくせ
ころれわされ　わるよかるも

（か）

かく紙ざらし　衿ゑぜそよし
三十二丁
かぐらどうらん　亀の甲より
川ろうずめ　かずよんで
かぶりぬり　かみでれだし
傘さして　笠を着て
かゝみて　かゝづいて

家をかけ　かまへあすで
かけまくら　かゞみの沈
がらんどし

（よ）

ようさがし
三十四丁
よせでいあげ　よびだし
夜がふけて　よふかごうし
よつかどまで　よい出合
そうや世間　夜明まで
よつき米女　よし葉立て
よつ日まも　よろづ屋で
まちあって　よいだぶん

ぞくぞくい
たゝきまち
ぜんあるとあがり
ゑもうもず
だいじょうけて
大ぶるぞうよ
たれどやいる
ゝざ
たてまつり
たんぽぽげ

(た) たゝいわのぶや 四七ウ
たんのうして
たゝく鼓しそ
だいゝんふ
大道ぞあ
大れ島して
たび鬼彩
たで咲しで
物ふうし
(れ) やん 四十ウ
ゆうてみて

れこそぶい
そうなぐら
(ろ) 四五ウ
ぼゆかぶ
ぼゆうてよ
ぼいぶぐら
つるの前
つゝきそ
はぎのこて
つまんでいる
つまけがまれ
(わ) わんぐゝ 四十二ウ
ゆんがあき

ねずみあき　（ね）なつがき　四十三丁
なんでもよし　なつびとう
ちりあり　なつきぬ
ふんぞりふてら　ふこうえふう
なくこえで　やんぐ　まつげ
ふらいねぶつ　（ら）らうこんぞう　四十四丁
らくこえで　らつちもん
らくごやけど　らちがあた
（む）むつまじう　四十五丁　もちやうこ
ものこまぐ　（う）うちあんて　四十六丁

強弁で　第八　ふこう
ちまちまぐめ　馬ものり
えんりょと　えつぐ
ちつけて　えつぐ
ちちこんで　動
（ゐ）ゐつてやり　うそおこと
（の）のみくとして　四十七丁　ぜいたく牛
のうぐやや　のうそ
のうけて　のう
のうこまし　ぜいたく

(ね) をの字にへ
(く) くろつら 四十八丁
くせづき
吟くれき
くろめきいれて
(や) 山くろじ 五十丁
やすうくれ
やくさぶく
やまぶき
やれきんど
(ま) 丸さ物まで 五十丁
のびあぐら
くろびとて
くせくろう
くいくあうき
(ぐ) 鼠色
ふくろふくと
やおふか
やぶく 猪
やれくさう
(ま) 丸さ物まで 五十丁

まちうて
まの物
ちくふあぐら
まつ向
まくとう物
ぬりちう
(け) げんぐん 五十丁
けつまづき
げんつもと
けーれ一ト目
(ふ) ふくりして 五十四丁
古いぐわくち
ふでくく

(こ) ごろうよん 五十四
ごろうみこて
ふきみよう
こもかぶり
ぐろげんよう
(ひ) ごろうでぶく 五の終文 五十六ノ十
てんやはで
てうちんさう
てふてふ
ふてはう

(き) きひ 五十七丁
ねりきがんで
あきくろうで
あたまきくた
ありがん
あをうで
あぢうぢて
あぢかぼえ
あげてんう
あせうして
あるやさた
あるが冷ふ
(さ) さんげん 六十丁
さんぴ飛して
さうこいうで

さるくいこ
さるさまに
さいはう
きぢかく
きがはれて
きげんよ
気がせける
きれふく
ゆびさす 六十三丁
ゆびさすこと

さるぢ
さるはうけ
きけんぢ 六十二丁
気ふうをる
木で皇こと
行家よう
ぎやうさんふ
きぬし
ゆきよせて
雪うるる

ぬじやナア 六十三丁
さらしよ
水しぼり
ふちじや 六十四丁
きちんして
ぎん者よ
上まん
えい女
ぎをいハち
船でぢ
きやべり
しやかま
きやんして

しゆつと消(き)え　新(しん)まい米で

しつうりと　志つうりと

志よく蕪(ぶ)ら　神(じん)まゐで

志んせつは　(ゑ) ゑくいやう　六十七丁

ゑん気に　ゑん縁かく

枝(えだ)を川て　恵(ゑ)まもちき

柄(えぶ)の日(ひ)かさ　夜(えん)かつくろん

えびす画(が)で　(ひ) ひとし遊(あそ)ぶ　六十八丁

ひんするあ　ひよろりて

新(あら)こま節　(も) もうずうる紀　六十九丁

もがくく　こんくつけ

(せ) せうるるひ　七十丁　せうるもひ

せらり(ぶ)して　(す) すつぽし　七十丁

すまふが遠(ちが)ふ　すがりて膝(ひざ)が

すみりわて　(京) 京(きやう)こゝまで　七十一丁

附言

○芭蕉翁の遺語に俳諧は中人以下の
ものと信ずるは俗語を平俗と誤まる
ゆえなり俗語を平俗と誤まるは
言葉にいくらもよきこと他もあれど
もいて捨てるものとなる新分する者の
題の中にもようさがしそびやかしひろげの
新ようよりはげしく選るるあれば㋝のかあ
すがあて差げは調ものれだよく出でて①の
かあるべきこと出でるはずと
ようさがしは㋐の新すがあて差げは㋜の
新ふ入ようれば初心者のいろはの
なるまぎ俗語をひきまく
ちぶれであるべきに多数合ちと
ぶあることなれよ

大正七年十月十六日寄贈
室井平蔵氏

冠吟言葉の種

戯、坊芦笛選

一

寄ろう

氷ふ

数くふ梅のえ

同じ絵でも立ぶ遠ふ

枝を生え屋で芸を切り

一枝で

菊も小立鶯も飛ぶ

いきくと

出中ぶ仲間を叶ひ

まつけたり　春むき
勝軍つるわまんぐ
ちらちらよりどや
いろいろ
ほうあてぐちきし
いそぐしん
紙くくはそてをいくしべ
団金かう
丸陸とまあてをなる
きひうわて

打角往てハふしづうふ
こ地のまい
物が服ゝ好キやこぶ俄り
刈りをけちら向ふれ
いひ付ケドや
辻でどふも勝日へ
物ずちくまでやまるわね
五ツ
なハはれつきかちんふを
塚の一ちゃをわらし

いくたびか
西楼の月をながめて
人々と感ず
迴廊しづくに水のながれ
木ぜんの奥でけるうん
筆丸暗めゆ中にあり
いくふてえて
もちひと称へ粽を為
いくさ八
風ふいてかすん方

石部金吉
遍のかハ来ませめ
見る情所点も茶所の粽
いつくも
人ハ惰思してゐんぜ
いるのかく
これちぐやんゑお鍋屋
新うき
搖るの枝ぶく吹行る
水の中で居ゝくん

仕立屋殺角まるとゑ
徒こらふ
駕かこの人を搦るどやけど
極乗の方にて急ぐはき
駕ちかよる浴衣拵
ろくと出て
四十八まで紐で明き
けちの五徳の徒えん
見えるおとしどや

終次第
おんなやくおとこ
樽を探して
人さくろうナウ
跡喰へ飯中しへち
ろくと笹を見迯ふ候して
編ぐちん
歌ちゃ出て仕てなれ
編よろ徒樽
見でるおやぢなろう

ろくろ使ひのそば
やきなどをくんと同じ合わ
考へ成り
常はあらべきかの塗り
けどくはたら
掘りぬきたるそこもひ
流よりして
女ひいもわさんでは
そうぶき
鮫津掘りする

けどうろ成り
其儀ぐるる屋でもろん
よいぶ
ぐぶ掘りを見えてる
梨子の花
小便擔桶と数しれず
犬のかける間も見好き
掃ちぐ
方子鞠の中出鳴聲り
徐ぐ牧がかえり掘て

腹が立ち
恵方巻やうく喰へさ
ちらの汁が牧ありて
八ツ時娘で
清吉も寝めもつき親
成長たく大二足
はるる後
笠を用意の雑炊き
第ちう
寒ちう
小ウ小ちう
極用の
あんちう
雑ちう
反物を生ち
山掛作やうかち
知りてくせくちのがき
げちうて
麦粉よ切ふえくケケ
麦もちまで第りある
俵ちう
粉方向ハ所いあけち

[illegible]ハ上てあき
牧氣[illegible]
[illegible]へ[illegible]
一杯[illegible]
ふこ[illegible]
[illegible]
[illegible]の中でもんぐ仕
[illegible]
生の水と水[illegible]の
[illegible]入遊[illegible]二人づき

二階[illegible]
[illegible]て[illegible]
二階[illegible]服業
[illegible]で[illegible]入
[illegible]やうて
一[illegible]ん[illegible]いでも[illegible]
[illegible]を通り
[illegible]
[illegible]
[illegible]

船ハ
ちんぢん　ちんぢん　行きぢ
ぢハ　葱を　葉じやんの
匂いぷんぷん
ぢでハ　ぢん上で　ぢ
ぢ　ぢハ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
又　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
匂い　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ

ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢも　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ

明まで長唄頭巾
さらでチャリがかれでよい
まづいひぶんハなんぞなき
はらりんと組ちて居る
とくと心得なしはなき
さらんな身楽る世界つ
国の者と下戸の者
がらくかし
それハ頭ぶる金くて
是でハ頭が持むしつく

またさ道中して敵をとる
かつらつゆ
結髪の竹に乗つて
色気をもつてさる
おつ家るる
鳥一羽ふして歩く
おせんのまで
色れハかつぎ様が数る
今晩言葉入込る
かつくかし

あるくハ為ようつ
都くてもけでもあるこ
ゑけくくく
あるくくもみ一ッ咬ひ
雪後で新と拵さい
ごくくくく
ひとつ屋へ義途ぐんさぐ
容易ようきく
下るからつく
アノさんん裏ハ狭い

下るまくで
すぐれ高りを天狗ぐと
あくの名びと根くべ
特色まて見ん意ハ海
色ぐくく行き
他ぐ云いけであくく
あッくいッも遊ぶてあく
アリヤ傍の坂さんぐや
ヘンド
ムくく
トンくくでハイおよび

こぼらまで　氣づきい
[illegible]
[illegible]の[illegible]で　遊び
アレ[illegible]ている　[illegible]
別ツよ　[illegible]
[illegible]
筑紫ハ[illegible]ものかんナア
[illegible]すまで
別ツくに
[illegible]の上[illegible]を[illegible]

此帝ハ[illegible]
五嗽吐し
[illegible]上[illegible]
[illegible]て　[illegible]国[illegible]
別世界
鴨川　[illegible]石[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
眼ハ[illegible]通[illegible]
[illegible]進[illegible]

どれこんも
千鳥に絡の浅葱
年うより
あみがやきぬがけおふんひを
しが葉で
まら文人にあぢきなる。
年頃し
ツイ仕草でお鏡燭
菜売も大かた其のの
ちせ放逸

餅ハ毎日おもしろい
どんど雛様
やげでう做あがおもしろい
いろいくレコ
桜ハ満くだちやの咲きく
手ぬぐひハ子が絡う
どちらくても
柄のおちみ氷まるひ
十冬もるん
揚さみるひど首を絡

ゐて来い

見やえじやうるよ

たまるの新と待てゐる

遠方しで

杖で都をかるげ

なんじや

えさんぶけのるがある

少ふをそるがやえん

ぐぐんえ

おいそれやれぐ来る

戸がぬいて

まゝ時んぐまやるぜ

いたでも尾が巾ィてえん

カ一ぺん

ぐんぐ箇ぐ猫きやせんぐ

山石剣ぐや角ぐえ

ちゝこざいるの美

美ぐ当ーてデエるぐ

おへえんぐ喰るでるえ

寄生ろ

三十六

行ほどあれてみかえりん
ちょこしおむ
そち西子の花お蓮らん
遠ちぢやられじ寛らうき
ちんちりと
かりぬもすまて深く積ぎ
舞でそろ方を供く
家根り若く遠入る家
扇てくへいぢり
ちんりんりん

縁の小門お水ちりち
坊ちあまりくゲニツのみ
二人差合楷房がし
鉛重ねして
縁くりだしてくる
此がわが出て
悩しほどけハだんなんひる
ちとらん
右うたちらハ喜び
将り立ち水ら一人結

三十七

ちちとご
ちゝ屋門ぢめん
氣
是ニテ吟て仕舞ま
ちゝんまで
ぐゝして元禄を敬へ
ひとおと
一是ちゝ
ナイ〳〵和尚ハ
ありがとう
水も魚ぶくてゝ
仲めそハ味噌を塗り
結髪一ぺん

紙ぺらゝんゝ
まるある鉢ハ親の背
力かゝ
相撲ゝ角力
ぺきゝる水入ゝん
の家鍋ゝけて
怪氣して
あれでも家ハ伊勢
理屈
ゝゝ一ま

利をせめて
蟹ぐるやなぎの陰にて
茶瓶ぐ夢ぞつ
あるにてんぐぐさ
めつて
我鼻ぐ思ひ
めるまでて
ぐ乳かく
ほうつし
めくい

絵羽織の人もみち
町の檀家を忘ぐ
ぬまぐ
ぬまげつとおび
ぐすぐや
体を俳て
ぬぐ
妙ぐんぐ差ぐ
ちぐあぐ文せ
ぬぐや

野猪の事を思ひやし
其刻やの
手拭で羞仕して
忠臣あしよ
出て探るの四十七士
おてがせん
よいやど不精あてくれる
ゆび折て入るや此頃じや
てうちんは
おまへが沸ておそて御座

おいてかまわれ
とんな淡でもだんなかまやの
愉しいものじや
まつちんちんを柳して
今春の南風で八拍もあ
大門をとうりめ
右衛門と治郎が関と関
諸ひおどきあがかりん
わくせいして
鬼の身て間手来ゐるする

是れなや
まちまちな手で織物を
糸のとりより繰いて引
轆轤輪ごとき
御てありける軸に入る
おくを膝かけてあるき
手ト蹴ものなれしや
行足いまだよけ迷ども
まるきやせぬ
こちの手綿もやきこう郎
御都の糸を紡ぐ風
て紡めるあしおてよ仕ぶ
綴し結びて
むし車輪がおりてげる
手ずみ嘴ぶ三め
キイキイして出来る
まわって来て
口まで合ふ綿のきに
傘堂の葡萄鼠ぞ
はるん・鶴

後の方はをとこ
ふのじやぜ紙をあぎよ
我まずれ
ソレ清計ぐらんぐぶ
買ふかくぐ
内の枕がくふくろ
地芝居で時鳥
鳥で鳥が相撲ぐと
色ぐつくまが負ひ
顔洗ぐ

大高ぐうぐ
姉きうんぐけ方といて
ちちぼ日那さん物ぎんろ
神仏ぐよ
中遊歩き内て猫ひ
四相仕事よてゆぐけ
芝居の下で石拾ひ
神楽ぐんちゃん
ハヽアン今日ハ矢敬日
竜の平ぐ

さゆ　名のゆ
茶屋の茶湯の
柳ぶりの結び
結ぶ
ハ　ぶら
アノ　ぶら
ぶら　かく
ぶら　かく　蛙　廣
智もギさこ
敷よんで
紅の　四
賀　ぶ　漬
ぶ　ぶ　漬

かぶ　振り
も　一升　石　と
子代の子
蕎　麦　清
ようて　ぶら
上汁　で　迫
ふら　汁　中納言
蕎　麦　行
吸　ぶ　で
柳　木　ヨン　と　躍り

軍さして
世よ源宮の為こうん
まぐ矢、意ぶ干山をと
口上をのかに行き
上溜まで失婦まい
望をとて
起きく格子をんふ
前ぶれく待ぼうぐも
かくまして
先生見る源牲

所付いて
軍れあくく陽を辰し
ぐくもどる鶴ふと
望をん
行方迷ひ磯ぐ伸ら
かすくまで
ちく上をばこをしる
行滝てを苦ひ
牲
ぐり
まを十二月上へきり

續の池

この中通りて立ちかく
繁茂の無住の寺
ちろ口いひく弾歌き
合点して

しいでちもも仕てろぞせ
遊び様し
小紋帷子ぐいふ
業勢なごりく石ガ来て
既に紙屑書ろろ

ませて小巻げ
矢立ちぐ中て石ろ
ぶび点し
絹紐い井戸の底くろ
今孫の至唐い味ろ
扇ろ牛汲ませ
奥ろ京て水て接市
夜ぐ実て
遅く浜行きぐ色
樊噲様歌信で通ろ

延ばし
道ハ法道
弟こ
こゝろ強き者ア
ものゝ
都や高野
寺法者ハ入色いで
鉢い工合
暇を冷すまじやけど
入日のゝ
二文ハ船の中でも

和国寺の
生田の強工
芋紙
ものゝ
角国で見の
ゝゝゝて
大ぶくお
水をむゝ
きみをかる
まゝゝ

笑ひ給ふめ
ゐたる子ども
下京所と紙に
布紙名所へ
薩摩立て
鶴の毛と曲を入色
恵でも注ぎでもぐん
書きも書も書く書
やうと気絶を
抱て揚げ
紙に
足書
冠
実今
白い
水
紙
ハ二ウ入色
書

簾ごしに
清門の月く 船繋ぎ
朝げ〻の朝茶を
高いものじや
一筋まいて紙ふい
ちく筑紫ふとりやよる
うふ魚中うれんち
便り待ち
獨言ふナアこそよ
毎り待の船ふやし

濁酒
影弱の船ち
雨の船で眼を閉じ
すやく至れさに乾き
軒にあぶれ
金のまく一歩付け
兎角して
六屋に見暗の月
五ち病
ちぷち寡のまくで

大腸ふ

茶碗に豆腐を煮て

大年ふかして

ふるまてすぐに水を落き

そろそろ茶碗でポンと入る

大通ろぶめ

入物でも茶碗、味ん

茶碗でのろん北の船ら

大坂迄ふ

功能一枚ワ特ス

紙ふの中へでぐる生

大特別て

皆の元ちんと黙りんす

詳ドやいる

一茶ちんの鏡が新ス

変しぼ芸者

帳で結かてみる迄

ちんの名

ちんたぎりて法華色

ちの美年ちの茶

蔘貪らぬで
岩橋の神 樽座り
文庫にさゞれ石像
奉り
宝経素小さき蛙
押経鐘コーし
ハイ門振りでござる
湯波 提
是がまれの御典薬
新造の着ぬ帯なや

わるがけて
あいつの傍じや言へぬけど
紀いへ
向ひさんもいかが済む
きめ良いピカくる蛙
レコ渋紙
只せてる咲めぐるるいわぬ
えいとるこ
半殺ハ水の中で切り
わるそめ蝶々粉まひ

氷結する眼鏡上げ

そうそうぐめ

ゆうべ矢立で書きたる

その白張を拭くてもも

蕪おろして

梅干の菊の風味ひし

かしの足ハ長の足

葱の汁の場所変

石いしぶいしもうしー

月ハ朧

年の暮て少便し

月ハ冴えて

梅の縁の所に

年の明ぐ減る

鶏の音

ヂイ油さしろんう

ぶつぶし結ぶぜ

連ぐあぐで

年ぐぶけ言で送る

杖ついて
地の
動くなく
寂ぶとでき
小さんものが
たゞぢハ様好くて
芝場の掃
ゑで
爺
新しいの

様人で入
ナイ
利休
ツイ
傳
ゑの
柳
念
時

結んこゝろ見入る
雲のゝ山やまゝ仕て上ギヨヘ
コりや酷コりや酷コりや畜生
年ンが明き
伏見人の常盤ハさゝ
義理ゆゑ
紙子が素ッて結ぶ世
夢が覚めて
笛を吹くぶゝ紙屋
やまゝ山紙ヘ音紙屋

まんでも紙い
ゝゝ出しんこう送ッたゝ
あど戸と井戸の蓋に住イ
結ぶゝけゝ紙ッ
ゝゝび紙ゝ
兼蟹ッ胡麻 載ッ
七ッ
郷ながいけち紙ゝい
井ゝ笑ッ
古人結ちゞ

なんで言ふてう
うんどを絡てもやせ
てこ変化つく指を広げ
たらへ指をや右へ捻
住つ笑ふ言ふう
わちつの中買をうん
きつ咎ごくを一生せん
陽四の前でもやげら
咲くまくぐ
左使ちくと言ふ

まんで条扇上
伸れの後ろ切で
アノ綱だんん 祝ぐけ
中ハ丸山
遠の船と浪ぶ
ちちこぷ
茶の狂花見ぐそそ
ちちぶりじゃそうぐ
楽さで
近代の鎌の気ぐうん

ちまたに
立ぬ
頃笠
せのびして
背伸しくだけ
ども
十里の路が
ちぢ
縮まる
物笠
蓑
あるくがおそい
紙
紙書
野川
浦

いたづらもどうの
手紙やうふ
新
人に石
十三
絵
ひとり
袖
踏
五年
言ハず二三
同年
乳ぶ
祥

牛八ウ
ヒヨ〳〵くれ竹うゑ
馬まぐさ
一文ちんぐポイと物
鉄〳〵ぶきいて書
あるん秋つゝ歩れんせ
又しそゝ此ちやぐちぐ
ゝゝゝ
どれうえよ行物を除ける

月ごろ
その姿加ゝ金ぐうえろんぐ
ゝゝゝ
はぢに至で紙集し
物付ケて
ゝ野枕ニ高さて
業が〳〵
ゝゝ保て牢ヨドやぐ
物まで見て中イて上
又一疋ゝ成ゝ剣

板の上で
下地の刺身さし合
かくわかくあたま猪
ぐらぐら汁もたべらる
ず猪者の筆をくくり付
ちんハ牡丹樹で刻り
まへきり用ゐ鮫よせ
鮫ぐらより汁ぐで食ひ
生鱠の素へ艾生き

夢てきくう
生鱠所らけぐしぞやぜ
敷くくくあつ足ぶう
くめてあつ黒
特殊をきくくあつ
野へもの
稲妻コツリ雲を吐き
聲く言ひぐ樹
赤味噌搗くかるた
燈籠ぐくうで云くう

の手の詰じやや
笠のぶくてくぼて帰り
チンツツンしぶり浮き
五十三繋ぎ船ぶ寄き

のんそく
巨燈をもて縋つくの手の
のり和ケて
大和通ひの船そげさ
のくくと
手ん仕てそ結髪うへ

のくくたち
和りて風ふくけそ切
春山ヤまの山
いけでも第代ぐ手のひ
迫ヤ女め
詞ばるたくくち臭ひ
水道ぐ小使ぐ使ぐやがけさ
意の牡丹ぶ水をそ
細常新ぶの結ぶ
追び步あ

いんこの世話の助言する

[illegible]

牝一枝　孝[illegible]　もう五

百[illegible]枝ゝ百[illegible]

[illegible]て

[illegible]礼い二日[illegible]

[illegible]の書[illegible]　馬を飼

[illegible]縁の奥かば

[illegible]が[illegible]

[illegible]神さんい[illegible]ばかり

[illegible]

[illegible]の根根水[illegible]

[illegible]小向で[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]銀[illegible]

[illegible]が[illegible]

[illegible]

[illegible]い[illegible]

[illegible]の向へ[illegible]

[illegible]の銀[illegible]が[illegible]

新八月の月見に
風へ寄り
新もたれ
舟入れて
寄せんとふる
き橋の下
為り一合づゝ
その上の入角
頭を成
石の上
下新八月
鍛冶
かんな細工
作り
山ハ
上る
智の生物ハ
郡
内中
酒

山道あるく
絵じやなんこりや鏡
やすらうくさ
ハあのいぬ 縛つき杭
家杭蕎
和ハぢんじのの下で明
みうまのちで物ふせぎ
唯我獨尊 個を信じ
精進所迫へくばる
ほうれト弱き屠き

割うる
梅地を縁の柄で搾り
ぶ 棒
ぶんぶ行をどくんぶや
やくぶる
ぶんぶ梅べくと行ケ
やれくさ
ぶんぶ氷塊り
やぢ辛炭
ぶんぶとやをそ

[illegible]へこそ
丸き物を
薗国の[illegible]
勅使[illegible]
[illegible]文字の[illegible]

待つあて
[illegible]
三ツ待ち
[illegible]
[illegible]

[illegible]の時[illegible]
毎朝
高野[illegible]
[illegible]

[illegible]て
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

びん唐芋はまめやうの考ひ
まうの
一ッ〳〵みな枝と吹き
金剛杖をはいて行
ちうじやし
時雨蟹うり市きうり
吟ぶれる牡や物を買
極楽
来山をゆかう角うり
牡丹知て風ひ

続つまびき

戸棚の中でちんばもの

けしやうの家ゝ有ル

だんつでグワンし

はけ迄きうや芋がうど

げんつてトユウ

ゆえてゆく猫じや手

糸文一トロ目

石ゝ糸ハ糸ハ

山ゆゝ糸ハ糸ハ

二人して

すぐ新茶ゆの信濃ゆき

迄ゝふ行き詰で有ル

ゝゝ有ゝ

茶の上ゝはけしやうこく

古ゝが茶ゝ

ゆばゝゝゝ幸拵ゆる

はけ物ハ人ハ居ずやく

筆ゝ

よのゝで馬鹿ゝ

[illegible]じや[illegible]
[illegible]の四[illegible]づく[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ[illegible]海の[illegible]
[illegible]
[illegible]ぬき
[illegible]と入れ
[illegible]
[illegible]上がり
[illegible]鰻夫
[illegible]細の[illegible]年[illegible]てすげ

[illegible]
入梅の[illegible]
[illegible]ハだん[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]く切を[illegible]
小[illegible]味[illegible]
水切[illegible]
[illegible]
[illegible]りい[illegible]

陸氣うんこ
捲もたんぽも傷うまぎき
ひらぐ　行の酒宴ぐ
みゑかぶうこ
紙う御けるかうぐやこ
言うるのまうやあれるやう
こうさばげ
閑章て艾あみつぶし
出月さんへ　十二上ぎ
陸機後よう

舟中で送うた捲ふ
翌くじや
風ぐぐん　水ふう
流く水で所を洗ひ
こうで一ぬく
鉢くけを笠よ月し
結る道具ハまて捲ん
ぐんぬふ空縁
鉢ぐこめうお巡ぐ門
天敬りで

どさくさに紛れの鉄砲
矢場の船に乗を折て
ぢらくに拵して森よ
牡蛎もちよふと行くら
矢まよふ
今エーゴくん音く拵る
音ようくん八ちくらく
角人云も仕合どや
牡蛎
ぐぐ多りまく仕ま

私
屋敷二の字おき
鯨洗ひくよう矢うきよう
外のる仕人場を沸し
へイかま鍋条恵まそ系
惰しふぐら
幼稚の節しを毛コぞ
富士と浅間の間を紛
八まんさんへ参たる
よぐだん

夜を昼へのばす一らうじや
新だて磨屋もつかん
十四文がうにやうばん
国のうちで宮へ文
　手を鳴らし
鮮は礼に浮きやせんか
朝はおんで
五色の鳳と海苔を雲
二番め校で鍋が鳴き
　鯵は歩くさ

東山うま鰻鮨
鯵しかとば
鷺へ古ん鶯どぶち
犬の磔を取りまする
鳥犬さす猫に表しん
さぎね縁でよう松掃き
樋の上に猿暮る押り
　あんまりじや
えきが切しうや燭を写する
柿ろく熟錦を呼て

あるまたき
銭をしてしく取きんう
コりや鮓くるあてぐぐかん
いく四ふるしく沢へ請こ
ぎぐくしんん
八鮓ふむこ付てふび
大のるよ物ますぐ
様あぐあ
さく物ふくたこく
ほ公飯するあ沢へ

味ぐ
ぬるやぐふきび
アノ魚ふへるぶる
ひるハ縄で身出やけどさし
ま付ぬく美ど魚でめて
味りて
嶋ふれでこそ浮山に

けげてんの
まくとつくる風をふく
汗ばむ
柿を綱ゞ拾ふ
橘をもぎる丘で鶏
汗ばんで
やり舎ゞだけが仕事
蟹はハサミ水で泳ぐ
鉄やぶれ
蓮を焼く夜行

らんの中に明が二ツ
光ゞあり
ゆくゆくふる
ゆゞ降ふる
ぶんぶんあゝ蚊蚊
なんぼ光ゞ拾ゝた
きんぱんし
きゝ西瓜
ぶとぢるで汗
仏法法迷やれ

美用して
沢山に出ハ行け
金銀ハ美しくべけれ
錆付き錆ハ
之を分節
如何様に
相応でなければ口ぶり
会釈の足
先く送る

皆安心
第五の酒で果頭清
さるべし
如人ぶみ
まず行を持て
遣さるて
新しき菓のくを
此婦婦は
花笠で
一文菓子

[illegible]は其[illegible]
[illegible]は淋しい彩[illegible]

[illegible]
[illegible]その[illegible]へる
[illegible]
遠く合ふあの[illegible]
[illegible]はこもく[illegible]いて
[illegible]
[illegible]ぱんと仕[illegible]
[illegible]

生[illegible]
一日[illegible]者[illegible]
[illegible]で[illegible]ふ小[illegible]
[illegible]で[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]をちと[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

木で葉こまかく通ったる
經糸でぐんと通ったる
こまかく何ようとゝのゝんせ
横糸
紋さんの糸こまかく
紅糸
糸の張をとゝのゝし
糸こまかく 糸紋こまかく
気づかぬ
物も知て何州の吉ゝ

紋山ふ
今かゝ糸ぐんでこまかく
機をゝの味ゝでまぶ
芋義なる
上ハ絵ふんぐるふん
紋糸こまかく東糸
芋ぬ
二ツ芋ぐん
おれ芋と白おし
ゆび竹で

[illegible]で[illegible]ぐ天の門
法云の經で
[illegible]ぐ新る[illegible]
[illegible]
たゝよふ容義
掌[illegible]ぐ
雲[illegible]
[illegible]
めしやナア
[illegible]ふけど

[illegible]ハ新修ひ
明白
[illegible]あけて[illegible]
[illegible]
[illegible]二[illegible]
[illegible]星[illegible]
[illegible]のどうで[illegible]
水[illegible]
[illegible]の[illegible]で[illegible]

水上ゟ
見ぐるしく結ひ付る
物の花
四和ゝ八幡宮ゟ
糸ぐるぐる結ひ付
ゆゑ
物の結ひ付をこ
見事にして
見ぐるしく結ひ付
男性しきよりて結ひ付

コレ之時結ハ結ひ付
結ひ付の出来ぬ
年縁と成り
家で武者を吹き立
行く物にて
尋ぬる
家を清ひ持ワ
新たに
こんにゃくハ方ゟ
ぬきをとの紙をさ

上ル

鮮ル新物で来る

意してから長崎名物

屋げ

ちゝ体製

ちゝ下でる

ちゝ新所を持て行き

ちゝ買て来る

ざるハ百

イヤ茶ぢやのゝ磯ぢやの

ちゝ

ちゝ エンヤラサ

地義のれを考へる

宿業賦ひ結義や立

内へ云てどう云ふ

云へ 鱈 沢山

自慢で知

わるい咲ル 千俵田作

[illegible]
アノまあ絹のたゝい細
[illegible]
[illegible]
[illegible]

戸柳の中へ糸引き入れ
神力で
唐織の糸
解くふく
先ゝから
清く薄く薫が立ち
あらはれ
陽炎ゆらめく
雲を
持ちと陽炎の人きする

遠方の
風の糸を
吹き乱す
枝ばかり
真っ白な紙
を形ばかり
花なるもんう
咲き乱れて
恵まれ
乙女の踊る

月の頃　拵る拵る色
大体くおもてをふんふん
物長の日傘
金魚のうちわ拵る奥さん
衣紋つくろふ
羽を伸ばしてあるかも知れぬ
戒名で
外出あれば本戸をしる
少し遠ざ
ふるの人知のえをふる

人みな
紙切れ切れ
等中の紙袋陰迷惑
ぶんて
上の絵ちがひ陰の墓
二丁目
迷惑のちがひ
えうちゃ
長ぐ袋がうる

[illegible]
[illegible]
[illegible]

情をして
近年が不揃ひを
すつくし
是を一ぢやうひきよ
南力が書ふ
ち絵の蒐馬とおろし
半眼流でも長者の中
すぐして陸ぢ
猪の上パチしろ
蛇茅のまゝ焼て煙

播
南国の紙で書
第十三番で
時のつまり時をみて
物之美用して仕事

風律爾芦笛選俳書

冠吟言葉行燈 全壹冊 出来

同 二編 三編 追〻近刻

新句集 近刻

浪花 めんつづけ ひとりちんぷん

新宗 **宵附獨案内** 中本全部二冊 近日出来

ちまたに流布する宗匠あの
逸を傳ふるものあり方今俳
諧不近ものあり其作鑄とたゝ一家の
考證とす 雜考弓好至のうゑ
初学ものゝ便利ものゝ生涯

天保十四年癸卯九月

書林 大坂心齋橋通本町南口入
河内屋平七板